

関係性の未来

海を越え、恩讐を越えて。

日英蘭 奇跡の出会い



つるかめ あきら
鶴亀 彰さん

1941年、鹿児島県生まれ。鹿児島ラ・サール高校を経て京都外国語大学を卒業後、旅行会社ニュー・オリент・エクスプレスに入社し、1966年よりロサンゼルス駐在。1980年、カリフォルニア・コーディネーターズ社を設立。日本から米国やメキシコに進出する企業の支援や、米国ハイテクベンチャー企業の日本市場進出をサポートする。在米40年を通じ日米往復は160回を超え、太平洋両側の事情や人脈に明るい。金沢工業大学大学院客員教授を務めるほか、トランス・柏姉妹都市委員会理事、トランスYMCA理事など、多数団体の理事を兼務。ロサンゼルス郊外ロミタ市に、妻と息子と暮らす。

鶴亀彰さんの著書『日英蘭奇跡の出会い』の巻頭には、父である鶴亀鶴一海軍大尉の遺書、そして笑顔の3人の写真が出てくる。鶴亀さん、オランダ人女性のカチャ・ボンストラ・ブロムさん、英国人のウイリアム・キング艦長だ。続いて、3つの潜水艦がイラスト入りで比較されている。写真の3人は、この3つの潜水艦でつながっている。鶴亀さんの父が乗っていた伊166は、カチャさんの父が乗っていたK-16を沈めた。そして伊166は、キング艦長の指揮するテレマカスに沈められた。第二次大戦終戦から60年以上を経て、海を越え、恩讐を越えて巡り合った3人。3歳の時に亡くした父を求めて調査と旅を重ね、奇跡的な出会いを果たした鶴亀さんに、希有な体験から考えたことを語っていただいた。

鶴亀さんの父を求める旅

■2003年9月

ロサンゼルスから日本へ飛び、防衛庁や厚生労働省で父や潜水艦の記録を探す。

■2003年10月

父の潜水艦伊166が沈められた地域を特定し、クアラルンプールへ。地元のヨットクラブの協力で、花を捧げる。黄金の夕焼けの中で、父や戦友の声を聞く不思議な体験をする。

■2003年11月

ロサンゼルスへの帰路、オランダ海軍基地を訪れ、父が沈めたK-16乗組員に追悼の献花を行なう。同潜水艦の遺族、カチャさんよりメールが届き、自宅に招待されて親しくなる。

■2004年3月

父の戦友の遺族に正しい情報を伝えるべく、訪日して遺族探しをする。メディアの協力により、感動の出会いが続く。

■2004年5月

伊166を沈めた英国潜水艦テレマカスのキング艦長が94歳で健在であることを知り、アイルランドへ。オランダのカチャさんも合流。

■2004年7月

伊166の遺族からメールが届く、60年目にして初の慰霊祭を佐世保の東山海軍墓地で行ない、約30名の遺族が参加。

■2004年8月

メールや電話で交流してきた日英蘭の潜水艦家族が、アイルランドのキング艦長の住む城に集う。

■2005年4月

三家族がともに日本に旅行し、佐世保の海軍墓地にサクラを植樹する。

■2005年7月

伊166が沈むマラッカ海峡で、海上慰霊祭を行なう。

■2006年7月

再びオランダとアイルランドを再訪する。

■2006年12月

ハワイでの真珠湾攻撃65周年記念行事に参加する。

現在も、旅は続いている。

『海に眠る父を求めて』公式サイト
<http://www.tsurukame-book.net/>



映像総合検索サイト YUGOBI TV
<http://www.yugobi.tv/>

「ニュースなどでは報道されない各国の日常の映像を見ることにより、異文化理解を深めてほしい」と、鶴亀さんが始めた新事業。YouTubeやGoogleビデオなど、あらゆるビデオサイトの映像を一度に検索できる。



『海に眠る父を求めて』
日英蘭 奇跡の出会い
学習研究社 1800円



海を越え、恩讐を越えて。

日英蘭 奇跡の出会い

つるかめ あきら
インタビュー：鶴亀 彰さん

父が殺した 相手の子どもとの対面

反対に鶴亀さんの父が沈めた潜水艦の乗組員の娘であるカチャさんは、鶴亀さん夫妻がオランダ海軍を慰霊のために訪ねたことを知り、自宅に招いた。「僕と妻がご両親の写真に手を合わせた瞬間に、カチャも僕も同じように父親を失った人間として、深くつながりました」。以来、家族ぐるみでのつきあいが始まり、鶴亀さんはカチャさんを妹のように思っている。

「愛国心というのは、排他的なものであってはいけません。日本には朝鮮人差別があったし、米国では日本人がジャップと呼ばれていましたが、こういう意識が戦いを生みます。南京大虐殺で殺されたのはせいぜい2万人だとか、従軍慰安婦の手配は業者がやったんだとか、そういう論争に感情的になるのも、日本人という枠を優先するから。でも人間というレベルに立ち返れば、目の前で両親が殺された痛みや、若い女性が兵隊の相手をさせられた悲しみを感じることは、誰だってできるでしょう」

そのためには、尊敬と平等が大事と考える。「勝ち組とか負け組とか瑣末なことが言われているようですが、命とか魂のレベルでいえば、人の間に差はありません。僕は命そのものに対する尊敬があれば、人間は平等になりうると思っています」

戦前を振り捨てた日本

米国では戦死した兵士の遺骨のDNA鑑定をひとつひとつ行ない、遺族に引き渡す作業を今も行なっている。オランダでは潜水艦の沈没地点の確認作業を続けている。それに対し日本では、戦死者は英霊として祀りあげられ、されど遺族たちには当時の戦死公報のみで、死の詳細は今もって伝えられていない。

鶴亀さんはそれを「負けた国の悲しさ」と表現する。「310万人が死に、原爆があり、国民は塗炭の苦しみを味わった。その結果、“戦前の日本は悪かった。だから、参加した兵士や軍人も悪かった”と切り捨てられてしまった感じが否めません。でも、国のために命を捧げた人はないがしろにせず、敬わなければいけないと思います。それを国が行動としてきちんと示さないと、若者はこれから国のために働こうなんて思いませんよ」



戦後50年から 60年にかけての、 心理的な変化

04年、鶴亀さんのことが地元の新報で報道された時に、連絡してきた人がいた。真珠湾攻撃の際、救助隊として活躍したエディ・ブルックさんだ。鶴亀さんと友情を結んだエディさんはこう言った。「私は多くの仲間を殺した日本人を、60年も憎んできた。その証に、救助にあたった時に零戦が私に向かって撃ってきた機関銃弾を、ずっと持っている。だが、あなたにそれをもらってほしい」

鶴亀さんは、戦後50年から60年にかけての、戦争体験者の心理的な変化を語る。「70歳までは許せなかったことが、80歳になったら許せるようになる。自分も死んでいくし、50年恨み続けたからもういいかという気持ちになるのかもしれない」。

それと同時に、胸に封印してきた戦争体験を語り始める人も増えている。「僕に一度話したことで、よそでたくさん話すようになった人もいます。戦争を語らずに生きてきた人たちは、つらい思い出、生き残った申し訳なさ、古くさい話で相手にされないだろうという気持ちをずっと抱えてきています。話すためのきっかけが必要なんです」

ここ数年、第二次大戦の体験を語るドキュメンタリーや、当時の敵国がともに参加する慰霊祭が、世界各国に見られるようになってきた。

「とられざる道」の ひとつを歩いて

数カ月で終えるつもりだった調査の旅は、多くの人の協力と善意に恵まれ、また偶然と呼ぶにはあまりにも運命的な出来事に導かれ、3年以上に及んだ。その間、仕事は実質、休業に近かったが、「何か大きな意思にひっぱられている」ことを感じ、旅を続けることにためらいはなかった。

夫妻はその過程をお世話になった人たちに報告しようと思い、詳細に記録していた。撮影した写真は1万枚、ビデオも数十本にのぼる。それを書籍として出版したのは、「遺族の方々にはわかったことを知らせたい。そして、今の若者と当時の若者の気持ちが通じてほしい」という使命感にも似た思いからだ。

アイルランドを尋ねた鶴亀さんに、現地の高名な詩人が語ってくれたことがある。「私たちは普通、今自分が立っている道が唯一の道だと思っている。その道に往生すると、悩み、焦る。だが心の奥底に尋ねてみると、自分の左右前後上下、至るところに別の道が見えるはずだ。残念ながら多くの場合、別の可能性は気づかれることなく、隠れた世界のままで終わる。しかし、今回あなたはその“行かざる道”のひとつをとった」

鶴亀さん、キング艦長、カチャさんは、子どもや孫とともに互いの国を訪ねた。アイルランドではキング艦長の住む城の庭にリングを、オランダでは海軍兵学校の庭にナシを、日本では佐世保の海軍墓地にサクラを植えた。

戦争の傷というものが、どうしたら、いつになったら癒えるのかはわからない。自分自身、父を亡くした喪失感や悲しみから、自由になれたのかわからない。だが、鶴亀さんは次の旅を楽しみにしている。「植えた樹がどう育っているか、また見にいかないとね」。

Text by：スマキ ミカ

夫婦の両親や家族の写真が並ぶ、鶴亀さん宅の写真パネル。これを見た日本からの客人が、鶴亀さんの父の調査を買って出たのが旅の始まりだった。



父を殺した敵との対面

鶴亀さんは還暦を迎えた時に、ふとしたことから戦死した父のことを調べ始めた。父はどんな人だったんだろう、どんな風に死んだんだろう——。父の潜水艦を沈めたキング艦長が94歳で存命であることがわかった時は、長い調査の中でもっとも興奮したという。どうしても父の死のことが知りたくて、「アイルランドに行きますから会ってください」と手紙を出した。艦長は当初「復讐されるのではないかと恐れ、会うのをためらったという。2人の対面はどのようなものだったのか。

「会った瞬間に、卑怯なことはせずに生きてきた人の強さと品格を感じました。うれしかったのは、彼が弁解もせず、逃げもしなかったこと。極めて淡々と、何でも聞いてくれ、という態度でした。キング艦長は戦後30年間も悪夢にうなされ、戦争のことは口にできなかったそうです。それが58歳から5年かけて単独ヨット世界一周の旅をして、自分なりにPTSDを克服したのです。これは後で彼の娘から聞いたことですが、僕に会った最初の晩に、以前の悪夢が戻ってきた。そういうリスクを負いながら、覚悟を決めて会ってくれたのです」